

所 陵

No.10

関西大学考古学等資料室彙報

昭和59年11月1日発行



人物埴輪(埼玉県上中条出土)

目 次

周康王の即位と重宝の陳列……………	2
上代刀剣の銘文にみる靈威的意義……………	4
消えてゆく京大「陳列館」……………	6
木崎好尚手拓の近世名家墓碑銘……………	8
関西大学蔵 青森県「是川遺跡」出土資料……………	10
昭和59年度調査報告「四国地方巡検記」……………	12
資料紹介「合子」……………	14
資料室ニュース……………	16

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

周康王の即位と重宝の陳列

横 田 健 一

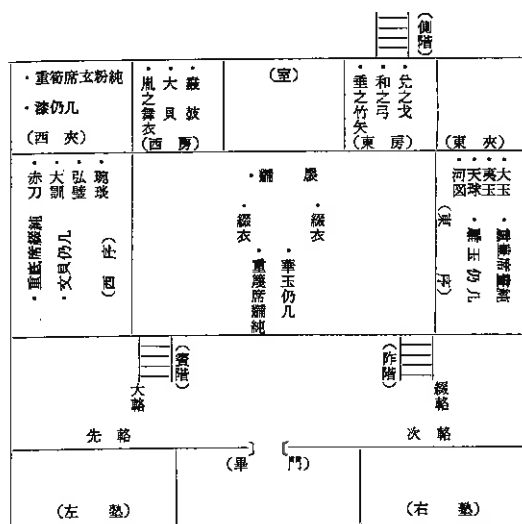
博物館や美術館のように、すぐれた重要な美術品、宝ともいべき芸術品等を陳列、展観することは、いつ頃から始まったのであろうか。東洋で文献上の初見について記そう。

『尚書』は『書経』ともいい、『詩経』と共に、中国では最も重要な古典で、堯、舜から夏、殷(商)、周第5代の^殷紂王までの歴史を記したものである。秦の始皇帝が焚書坑儒を行った時に、秦の博士であった伏生が壁の中に塗りこめて隠したものを、漢の孝文帝(BC180-157)の時に取り出したが、29篇を得たという。(『史記』儒林伝)

その後、漢武帝(BC141-87在位)の時代に、孔子の旧宅の壁から出た16篇の『尚書』があり、これを『古文尚書』という、文体や内容の検討から、前者の『今文尚書』の方が、古体を存し、後者を後代の偽作と考える学者も少なくない。

ここに取り上げるのは前者の中の第25篇「顧命」で、周成王が崩じ、康王が即位した時に国家の重宝類を陳列、展観に供したとある。なお成王は、周王室の初代文王(西伯昌)、第2代が武王(^{しょう}発)、その子で第3代にあたる康王の太子で名を釗という。周初の年代は未だ確定していないが、およそBC1000年余、前11世紀代のことである。

以下「顧命」の文を野村茂夫氏著『書経』の訳文を参考にして述べる。



この図は黄鎮成「尚書通考」による。

顧命図(野村芳夫著『書経』1974 明德出版社刊)

成王は、在位年末の4月16日甲子に太子や重臣百官を集めて遺言し、翌17日乙丑崩じた。太保すなわち宰相にあたる召公は、仲桓と南宮毛に命じて太子釗を迎えさせて、喪主とした。丁卯(19日)に、史官に命じて、成王の臨終の命を記した冊書と法度の記録を作らせ、その7日後の癸酉(25日)に召公は、土に命じて棺材を作らせた。楽官の狄人は斧の文様を描いた屏風と帷帳とを成王の生前のように設けた。

正殿中央の窓のある間に、南向きに竹を編み、白黒の糸をまじえて縁どりをした三重の席(敷物)を敷いた。五色の玉で飾った脇息を傍に置いた。ふだん王が使用していたものである。

王が朝夕に政を聞く西序(西側の脇の間)には、東向きに、蒲で編み五彩の糸で縁どりをした三重の席を敷いた。文様のある貝で飾った脇息を傍に置いた。これも王がふだん使用したものである。

国の長老たちに宴を賜わり、群臣にも酒を賜わる座である東序(東の脇の間)には西向きに、竹の皮で編み彩色のある糸で縁どりをした三重の席を敷いた。彫刻を施して玉で飾った脇息を傍に置いた。

王の親族の宴会の座である西夾には、南向きに、竹の皮を編み黒の縁どりのしてある三重の席を敷き、漆塗りの脇息を置いた。

以上の4席は、天子平生に用いるとおりに席を設けた。野村氏は「いま天子の霊がそのどれにとどまるか知ることができないため、すべて平常どおり席を設けたのである」とする。原文にない文だが鋭い指摘である。ここに玉を五重にならべ、また王が宝としたものを陳列した。

武王が殷の紂王を伐つに用いた赤い文様のある刀。太古から文王、武王までの記録である大訓。大きな璧(円環状の薄い玉)、琬と琰と名づけられた2つの玉、これらは西序に置かれた。

大玉、夷玉、天球の3つの宝玉。河図という、太古の伏羲氏の時に竜馬が黄河より背に負うてもたらした神秘の図。これらは東序においた。胤国製作の舞衣、大きな寶貝、大太鼓。これらは西房においた。名工兗の作った戈。名工和の作った弓。垂の作った竹矢は、東房においた。

玉をもって飾った車、大略は、西の階段である賓階に南向きにおいた。黄金で飾った綴略という

車は、東の階段、阼階^{そかい}に南向きにおいた。

装飾のない木製の車、先轅^{せんえん}は左塾^{しやく}の前においた。革で飾った車および象牙で飾った車である次轅^{じえん}は右塾^{しやく}の前においた。以上5つの車は、成王存命の時と同様に配置された。(中略)

王は、その地位をあらわす黒色の麻製の冠をかぶり、斧の文様のぬいとりをした裳をつけ、賓階より堂に升った。賓客として、先王の命を受けるためである。卿・大夫および諸侯たちは、みな同じく麻製の冠をかぶり、黒色の裳を身につけ、王の後から堂に上り、所定の位置についた。

太保召公奭と、太史(記録官)と、太宗(礼官)とは、いずれも麻の冠をかぶり、赤い裳をつけた。太保は介圭(天子の持つ太王)をささげ、上宗は、同(祭祀に際し、酒を酌む器)と瑁^{ぼう}(諸侯の手にした圭にかぶせる四寸四方の玉)を持ち、阼階より堂に上った。太史は、成王の遺命をしたためた書を手にして、賓階より上って、王に成王のみことのりを伝えた。

太史は亡き先王の遺命をよみあげて言う。

「大いなる君成王は、玉の脇息に身をよせて、終りにのぞんでの命を申し述べ、汝^{しやう}釁^{せん}をして、文王・成王の教を受け継がしめんとするのである。汝は周国に君臨し、先王の定めたまえる大いなる法度に、すべて従って、天下の人々を和らげ睦ませ、もって、文武二王の輝ける御教えに答え、いっそう王徳を盛んにせよ」と。

王はこの言葉に対し、再度頭を垂れ、ついで起ち上がって答えた。「ああ、とるに足りない幼きわたしは、よく父祖の如くに天下四方を治め、天の威徳をうやまい畏れることができましようか。心もとなひ限りであります」と。

ついで同と瑁を受けとり、王は三たび爵(酒器)を神にすすめ、三たび酒を神にささげて祭り、三たび爵を置いた。太宗がいう。「神は王の祭りを受けた」と。(以下祭の次第略す)

この文章は、周代の王の即位儀礼を如実に語って要を得ている。ここに展覧された宝物は玉が中心で、それに刀や弓矢、戈のような武器と、大訓のような系譜的歴史、河図のような地図であることは興味深い。宗廟社稷を祭る尊や鼎や爵、杯のような食器、飲器に鼓鐘のような楽器はない。

右の重宝については『周礼』巻20「宗伯礼官之職」の「天府」(祖廟の守護と禁令を貴とぶ官)の条に、「凡そ国の玉鎮、大宝器を蔵す。若し大祭、大喪あらば則ち出してこれを陳す」とあり、重要



書経(関西大学泊園文庫所蔵)

な大祭、大喪には出陳・展観する役人であった。この条の鄭玄の注に「顧命」の宝器の条が引用されている。なお『周礼』の同条の前の「司几筵」が『尚書』の宝物敷設の官人であったことがわかる。

『史記』周本紀第四の武王即位条に「南宮括と史佚とに命じて、「九鼎保玉」を展した」とあり、「保は一本宝に作る」との徐広の注をのせる。九鼎のごとき宗廟社稷の祭に用いる青銅の祭器を宝玉と共に展覧したらしい。なお、南宮括は、前述南宮毛の父が祖父であろうか。

なお『史記』のこの後段、西周と東周の交代期の記事に「東周と西周と戦う。韓西周を救う。或るひと東周のために韓王に説いて曰く、西周は故天子の国なり、名器重宝多し。王案じて兵を出すことなかれ。」とある。

周に重宝の多かったことが後世まで有名であったことを示している。

なお『尚書』「旅獒」篇には「宝玉を伯叔の国と分つ」とあり、周は親戚の国々に宝玉を分与した。それに対し、『詩経』「毛詩」巻10、10之1「湛露」に「彤弓^{だんきゆう}、天子有功の諸侯にたまうなり」とあるように、諸侯には赤い弓を分与した。興味深いことである。なお『周礼』巻20の「天府」の条の、周の祖廟は始祖后稷の廟で、宝物を世伝しているが、それは魯の国の宝玉と大弓のごときものであるという。

玉と弓矢の宝器としての地位を察するに足る。

上代刀剣の銘文にみる霊威的意義

網 干 善 教

最近考古学資料に対する科学的、先端的技术の利用により、従来検出することのなかった新しい事実が確認されるようになった。そのうちレントゲンの利用は過去にも多くの成果を挙げてきた。例えば遺跡や古墳出土人骨の撮影や阿武山古墳における撮影によって玉枕の状況が判明した例などがある。

近時は古墳出土の鉄剣、大刀や鏡をレントゲン撮影した結果金象嵌、銀象嵌の文字や文様が確認され、古代史研究に大きな成果をもたらした。

こうした銘文や文様が一体刀剣にとってどのような意義をもつものであろうか。換言すれば製作者がどのような意図をもって嵌入したのであろうかという疑問と関心をもつ。

考古学では出土遺物を解釈するとき往々にして「呪術的」という言語で表現される。しかし「呪術的」という用語に極めて曖昧な言葉であって、読む側、聞く側からすれば理解しにくい。

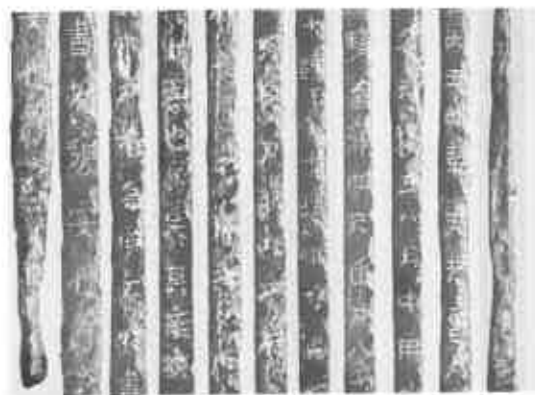
それよりも、奈良東大寺山古墳、熊本江田船山古墳、埼玉稲荷山古墳、島根岡田山古墳や兵庫箕谷2号墳のような鉄剣、直刀の銘文が果して呪術的と表現される概念にふくまれるかどうかを検討してみる必要がある。

本来「呪」という概念は「いのる・のろふ（のろひ）・まじなふ・うらなう」であり、仏教用語では「陀羅尼」である（諸橋轍次『大漢和辞典』1968年）。「呪術」を宗教学的にみれば（小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973年）「呪術とは、何らかの目的のために超自然的存在（神・精霊その他）あるいは呪力の助けを借りて、種々の現象をおこさせようとする行為およびそれに関連する信仰体系」とし、プレーザーの呪術先

行説とデュルケムの宗教先行説とが対峙していると。そして、同書では「呪術と宗教のいずれが先に生れたかを歴史的に跡づけることは困難であるし、宗教と呪術を区別することがむづかしいことが、その後の人類学者たちによって主張された」とする。

さらに「呪術と宗教の境界は文化によって異なるし、両者が互いに混在している場合が多いので、最近では《呪術—宗教的》（magico-religious）という言葉を用いる傾向が強いが、呪術と宗教とは、理念的な態度として区別することが出来る」とし「呪術は統制的態度からなるのに対して、宗教は懇願的態度からなるといえる」と述べ、さらに呪術の機能について「呪術は、霊的存在によって望ましいことを起させようとするものであるから、将来何が起るかを超自然的に予知する前兆の信仰に密接に関連している」とする。

哲学的には（平凡社・『哲学事典』1971年）「呪術は一般的に宗教と対比される概念である。しかし現象のうえで実証的に両者の相違を指摘することはむづかしく、現在まで論じられている相違点



江田船山古墳銀象嵌大刀銘

は、おもに対象、行為者の態度や機能などに即してなされている。今日有力な見解としては、人間が技術的、自然的に適応できない状況に直面したとき、自己の能力や考え方を否定するのではなく、それらのうえに、超自然的な力を利用し、駆使し、危機的状況を克服しようとする一種の目的合理的方法であるといわれる」とし、呪術は大別して模倣呪術と伝染呪術があると述べられている。

このように漢語的、宗教的、哲学的な呪術の概念とそれをめぐる論争のなかで、考古学徒が使用している「呪術」とは概念規定に若干の相違がみられる。すなわち考古学徒の呪術の意味のとり方は諸橋氏の挙げる「いのり・まじない」の類であろうかと考える。

さて、レントゲンの利用によって刀剣類に文様や文字が確認できた場合、これが「呪術的意味をもつもの」と記述される場合がある。その場合「呪術的」なものと理解することが適当かどうか。すなわち埼玉稻荷山古墳の鉄剣や島根岡田山古墳出土の直刀などの銘文が、果して宗教的、哲学的というところの呪術の概念に相当するかということである。

刀剣類にみられる金、銀象嵌は大別して文様を描いたものと銘文を刻んだものがある。文様を刻する場合、それが単なる装飾的な意味だけのものか、あるいは宗教的、哲学的という呪術に該当するものなのかは、製作行為者の意図にかかわる問題であって判然としない。ところが、銘文となると、これは文様とは異った意味をもつ。私見では刀剣に銘文を刻むということは、その内容からみて、前述のような呪術的なものとは考え難い。そうした場合、これをどのように表現すべきであろうか。

管見であるが適当な言葉として抽出したのが「靈威」である。しかしこれが果して靈威に相当するかどうかはわからないので、「靈威的」としておく。「靈威」の熟語の漢語の意味は（諸橋『大漢

和辞典』前出）「靈妙な威勢。不思議な程の威光」ということである。その出典は『史記、樂書』の「經二萬里一兮歸二有德一、承二靈威一兮降二外国一」を挙げ、『班固、泗水亭碑銘』の「靈威神祐、鴻溝是乘」、さらに『晋書、樂志、正旦大会歌』の「振二靈威一懷二萬方一」を挙げている。

「靈劍」という熟語もある。「靈妙なはたらきのある劍。靈徳のある劍。くしき劍」と解し、出典は『梁簡文帝、庶子王規墓誌銘』の「榮珪掩レ采、靈劍催レ鋒」を挙げている。

東大寺山古墳、江田船山古墳、稻荷山古墳や岡田山



稻荷山出土鉄剣銘文

古墳の鉄剣、直刀にみられる銘文は一種の靈劍のような性格をもったものではなかったろうか。これは同時にその剣が「靈威の意味」をもつものと考えられていたのではなかろうかと考える。

劍、刀身に銘文を刻むということは、実用に耐えられる刀剣であつたとしても、むしろ特殊な意味をもった刀剣であつたとした方がよい。その場合、呪術的なものと考えより、その刀剣に靈威の意味をもたせるものとした方が、銘文があるという特殊性に対する理解としては容易となる。特に稻荷山古墳の銘文の内容からうけるものは、「靈妙な威勢、威光」を示すものであろう。

特にその象嵌の材質が金、銀を用いているということは、劍、刀身を身につけ、あるいは視覚に提するために施したものであつて、それを誇示することによって、はじめて象嵌銘を施した意義があると考えられる。

消えてゆく京大「陳列館」

加藤 一 朗

百万遍四つ辻に近い門から、本部を含む京大構内に入っていくと、40メートルほど先の右側に、通称ただ「陳列館」とよばれて来た古色蒼然たる建てものが立っている。大きな古代の石棺の配置された内庭をとりまく口の字型二層の鉄筋コンクリート建築である。いまでは中はほとんど空洞化していて、解体を待つばかりという。京大関係者のなかでも、この建てものの存在を知っているものは決して多くはない。しかしかつてここで青春を燃焼しつくした史学科（日本史・東洋史・西洋史・考古学・地理の5専攻）出身者にとっては忘れようにも忘れられない建てものである。誰が名づけたのかもはやわからないが、「陳列館」とはいえて妙な名称であるが、ここには考古資料・古文書類・美術史資料・古地図・民俗学資料等が収蔵され、また史学科全体——教授個室・専攻別研究室・教室・図書閲覧室・書庫——がすっぽりとおさまっており、地下には小使い室（むかしの呼び名）があった。つまり史学科学生にとっては、京大に入ることがとりもおさずこの「陳列館」に入ることであった。筆者も戦時中の数年をこの館の中で過ごした。授業としては、おもに西洋古代史に関する講義に参席し、残りの時間は、午後9時まで開いていた図書閲覧室で過した。そしておもに、当時未だ日本語訳の出ていなかったブルクハルトの『ギリシア文化史』（独語）とロエブ＝クラシカル＝ライブラリーのツキジデスの『ペロポネソス戦争史』（希英対訳）に挑戦した。正直なところ皆目「わからなかった」。来る日もくる日も辞書を片手に同じ頁とにらめっこしていた。この「わからなかった」ことを「わかれう」とする衝動が筆者の後半生を支えてきたように思う。ただ就職の心配がなかったので日々は安定していた。前に戦場と死とが待ちうけていたからである。偶然にも生きながらえて終戦をむかえた筆者は、この館にもどり大学院に籍をおいて、学生時代拝聴した故岡島誠太郎氏（非常勤講師・当時奈良女高師教授）の講義が縁となって古代エジプト史を専門とするようになった。

もちろん個人的感傷にふけるためにこの稿をおこしたわけではない。この館と関大考古学研究室

とが少なからぬ縁をもち、関大の研究室・陳列室が近々現図書館本館のあとに移って一層の飛躍をとげようとしているいま、この館のことが多少は他山の石として役に立つのではないかと思ひ筆をとった次第である。

そもそも関大考古学研究室の生みの親であられるわが末永雅雄先生はこの陳列館内の濱田耕作氏の主宰された考古学研究室の御出身で、かつて同先生が口ぐせのように「濱田先生が」、「濱田先生は」とおっしゃっておられたように記憶する。私の誤解でなければ、関大の考古学研究室のルーツの一つは濱田研究室に求められるときえ思われてくるのである。さらにそのルーツを探ると、濱田耕作氏はイギリスに留学してペトリ（ピートリ）教授の指導をうけ、帰国後日本ではじめて考古学の講座を開かれたそうである。そうとすれば関大考古学のルーツの一つは「近代考古学の父」ペトリにまでさかのぼることになる。ただ濱田氏がなぜ留学先をイギリスに選ばれ、かつ指導者としてペトリを選ばれたかは今となつては全く謎につつまれているよしである。

また陳列館の収蔵品のなかでは考古資料が圧巻であつて、第1陳列室には日本とアジアの遺物があり、第2陳列室にはエジプト・メソポタミア・ギリシア・ペルーなどの遺物が収められていた。関大考古学等資料室の角田芳昭氏は博物館実習生を連れて陳列館を何度か訪れておられるそうであるし、同館の樋口隆康・小野山節氏は毎年の如く、非常勤講師として、関大大学院で考古学の授業を担当してこられている。筆者も関大エジプト研究会の会員をつれて何回か、おもに第2陳列室のエジプトの遺物を見学してきた。そしてその都度学生諸君にいったものである。「ここには展覧会などで見るような美術品はない、しかし勉強の材料になるものは、わが国ではもっともそろっているはずだ」と。

その「陳列館」が消えてゆく。解体の理由が極度の老朽化にあること、いつかは「博物館」として再生することを聞かされても、やはり淋しい。そのようなウェットな人びとが集って、去る7月

21日（土）、「陳列館惜別の会」が催うされた。その第1部は午後2時から文学部本館第6講義室で開かれた「陳列館の70年」と題する講演会で、講師は源豊宗・宮崎市定・長広敏雄・織田武雄・前川貞次郎の5氏（筆者にとってはいずれも恩師）であった。聴衆は超満員であった。その全内容をここに伝えるいとまはない。印象的に報告することを許されたい。最初に講壇に立たれた当年90才の源氏（日本美術史家として著名、大正10年卒、これは著者の生れた年）がもっともお元気であった。在学のころ先生も学生も和服であったこと。折からの「南方研究ブーム」で新村出氏らが南方の研究にいそまれたこと。それと関連して濱田氏らがかくれキリシタンの墓石を探し集められたこと。2階の貴賓室にイギリスのウインザー公（当時皇太子）や考古学者グスタフ＝アドルフ（当時スウェーデン皇太子、のち国王）をむかえたこと。などなどを話されたのち、教授陣の若かったことを強調されて「上田敏先生が43才、内田銀蔵先生が48才であった」といわれた。つづいて東洋史の宮崎氏は、当時政党の作った最初の内閣である原敬内閣の教育方針で旧制高校が急増され、その一つである松本高校をへて京大東洋史に進まれたこと。そのころ数年にわたり東洋史専攻生がなかったのも、「自分は東洋史中興の祖と自認している」こと。また当時東洋史を学ぶにはどうしてもフランス語が必要であったということなどを、むかしの授業さながらにたくまぬユーモアを交えつつ訥々と語られたあと、一段と声をはりあげて「陳列館が将来博物館になると聞いているが、大学博物館は宝庫（たからぐら）になってはならない。宝物（たからもの）は要らない。あくまでも学生の教育の資料を収蔵するものでなければならない」と叫ばれた。3番目に病軀（びようぐ）をおして青白い顔で登壇された長広氏（考古学者、故水野清一氏とともに『雲崗』の研究・刊行者）のお話しぶりは悲壮感さえただよかった。その発言では、「考古学の対象は古いものであるが、学問としては新らしいものである。外国ではペトリー、セイスらによってはじめられ、わが国では濱田先生によってはじめられた」、「濱田先生のえらかったのは視野が広いということであった。研究の対象は、日本・中国に限られず、アジア全体、ヨーロッパ、ギリシア・ローマからエジプトまで、いいかえれば全世界に及んでいた」、「同先生はネフェルティティ女王像（エジプト）やパルテノン神殿（ギリシア）などの模型も集められた。これ



陳列館正面

は一見識であって、欧米には模型だけの博物館もあるのである」、「陳列館は日本でもまことにユニークな建でもので、私はこれをカレッジとよびたい、そして濱田先生はカレッジ＝マスターであった」、「今日これほどのものが当館に集まったのは、おもに個人的寄付によるものと思っている。そのいみで全国民に感謝しなければならないが、考古学は絶えず原点に立ちもどって、基本にあくまでも忠実な学問でなければならない。考古学はさわぎたてるものではない。マスコミにリードされるようではいけない。ブームが去ろうが、流行が去ろうが、時代がどう変ろうが、かわらない原点があるはずだ」等々がお話しの主旨であったように思う。これら諸先輩が想い出を縷々（るる）語られたあとなので、織田（地理）・前川（西洋史）両氏がお話しされる話題があまり残っていなかったことは少しくお気の毒であった。いずれも挨拶でいどの短いお話をされたのでここではその内容については省略させていただく。

「惜別の会」の第2部は陳列館内庭で開かれたビア・パーティで、講演会聴講者たちが三々五々その方へと流れていき、ビールをのみながら廃虚となった感じの建でものにそれぞれ別れをつげた次第であった。筆者はこっそりと正面玄関（写真）から出て、向って右側にはめこまれている銅板の文字を、おそらくはじめてゆっくりと眺めたことであった。そこにはむかし風に、右→左書きに「京都帝国大学・文学部陳列館・史学科研究室」と浮き彫りにされていて、「帝国」の2文字が墨で消されていた。

木崎好尚手拓の近世名家墓碑銘

肥田 皓三

関西大学考古学資料室に木崎好尚手拓になる近世名家墓碑銘の拓本が80数点所蔵されており、それについての所見をもとめられた。よって木崎好尚（1865～1944）のことと、その掃苔癖について知るところを以下に記す。

木崎好尚（愛吉）は大阪の人、明治26年に大阪朝日新聞の記者となり、のち大正初年に新聞社を離れ、以後は東京へ移って文筆を専門とした。「大日本金石史」（大正10年）「大阪金石史」（大正11年）「摂河泉金石文」（大正3年）などを著す。かねて、従来から研究に取組みつつあった頼山陽と田能村竹田の事蹟を闡明にして、「頼山陽全書」（昭和7年）「田能村竹田全書」（昭和11年）を編纂し、「頼山陽全伝」（昭和6年）「大風流田能村竹田」（昭和4年）「頼山陽書翰集」（昭和2年）などの大著を完成、雑誌「山陽と竹田」を主宰した。初期の随筆集「旅懺悔」「返り花」（ともに明治32年）、また「西鶴研究金の巻」（大正12年）「篠崎小竹」（大正13年）などの著書もあり、専攻範囲はきわめて広い。しかしながら、近世漢詩文を中心とする江戸時代学芸の流れが生涯の研究課題だったとしてよからう。

木崎好尚の掃苔癖は早年の頃からのもので、明治23年の夏、友人の磯野秋渚と共著で「浪華墓跡考」を著している。この書は大阪の郷土先賢、と

くに文学にゆかり深い先人たちの墓所を、市内の各所に搜訪した探墓記録である。共著者の秋渚は同じく朝日社員であり、大の仲良しの文学仲間であった。そして本書の成った時、好尚、秋渚ともにまだ20歳代の青年であった。

この「浪華墓跡考」は、森鷗外の実宰した雑誌「しがらみ草紙」に連載のかたちで発表された。すなわち、「しがらみ草紙」第11号（明治23年8月25日）に第1回として「はしがき」が載り、以後、同誌の第18号（明治24年3月25日）までに全部6回にわたって掲載（途中第16号と第17号は休載）。収むる墓目54であった。いま、その「はしがき」を再録して、好尚と秋渚の探墓の意図を聞くと、

「かくれし墓跡の累々として世にあらはれぬるはその苔の下に眠れる人の慕はしきによりそのなしし事業の学ぶべきによりとなん覚めぬる。吾が難波はそのかみ文学の名士に富みしかばそが墳墓随ひて多く、この寺院かしの名所に残れるも幾ばくなるを知らず。さるからにこの土にすまいぬる文学者のこれを探りてそのかくれたるをあらはすことの理りなるに、その人昔はありて今はたなきぞうらみなる。吾等膽薄くて知らず顔に打おきがたく、いとまのをりをりさぐりにし墳墓すでにおびたしくなりぬ。いまそのありし事どもをあつめて浪華墓跡考と題しつぎつぎに掲げなん。むかし曲亭のおきなこの地にあそびて名だたる墓跡を弔ひて、これをよきもの三つの中にかぞへられき。されば吾等の企てはそのよき墓跡を世にあらはして、見ぬ世の人のをもちがしたふよすがにもとてなりけり、好尚、秋渚合著」とある。

大阪文学の先輩たちをその墓所に訪ね、遺芳をしのぼんとした若き青年のひたむきな気持が「浪華墓跡考」を成さしめたのである。上の文中に「曲亭のおきな云々」とあるのは、馬琴の「羈旅漫録」に「大阪にてよきもの三つ、良賈、海魚、石塔」と記してあることを指している。

連載の完結にあたって、他日の補遺を期すと付記しているが、いち早く「続浪華墓跡考」は雑誌「なにはかた」第2冊（明治24年6月5日）に載



木崎好尚(1865～1944)（朝日新聞社史編修室提供）



井原西鶴墓碑拓影

り、10数家の墓目が追加された。ただし「続浪華墓跡考」は磯野秋渚単独の調査で、好尚は関与しなかったらしい。のち、さらに増補を加えて「浪華墓跡考」と「続浪華墓跡考」は一部に合せられ、磯野秋渚の著書「なには草」(明治33年3月)に収録された。秋渚はここで「本書は最初友人好尚と合著なりしかば、署名はなお旧に依る」として、好尚・秋渚合著の形を残している。

「浪華墓跡考」に先立ち、好尚は明治22年11月14日の読売新聞に「西鶴の墓」の一文を発表している。それによると好尚が大阪誓願寺の西鶴の墓に詣でたのは同年10月20日のことだった。この年の1月と8月に幸田露伴と尾崎紅葉がすでにここに詣っており、2人の供えた卒塔婆が西鶴の墓前に立てかけてあったと好尚は文中に報告している。東京の露伴、紅葉の墓参は、同世代の好尚、秋渚をいたく刺激して、2人の探墓行を切実にうながす動機となったことは確実である。

考古学資料室所蔵の好尚手拓の墓碑銘は以下に

その細目を示すが、このうち約20点は「浪華墓跡考」所載の墓碑である。大阪関係はなお多く50点以上を存する。長年の風雨に碑面の損傷が進み、今はこれらの拓本類はますます貴重な価値を増している。こうした大阪にゆかり深い文化財が関西大学に無事に保存されていることはじつにうれしいことである。

大阪に墓碑を存するもの(アイウエオ順)

暁鐘成(瑞龍寺)。二世暁鐘成(妙香院)。麻田剛立(浄春寺)。稻生恒軒(天龍院)。入江育斎(実相院)。入江昌喜(梅松院)。井上真改(重願寺)。大塩家先祖墳墓(浜村墓地)。大岡春卜(光明寺)。大岡春川(光明寺)。大畠梅嶼(玄德寺)。片山北海(梅松院)。義童勘太郎(法善寺)。北尾禹三郎(天龍院)。衣川長秋(円珠庵)。木村兼葭堂(大応寺)。黒沢翁満(珊瑚寺)。契沖阿闍梨(円珠庵)。五井蘭洲(実相寺)。河野怨斎(光明寺)。小山伯鳳(重願寺)。近藤潜蔵(梅旧院)。斎藤方策(梅旧院)。斎藤鑒江(浜村墓地)。佐々木専林(浜村墓地)。篠崎静心(天徳寺)。篠崎主馬(天徳寺)。篠崎三島(天徳寺)。篠崎小竹(天徳寺)。篠崎興讓(天徳寺)。篠崎竹陰(天徳寺)。澁井太室(玄德寺)。竹本播磨少掾(四天王寺)。田中杏亭(光明寺)。田中桐江(池田大広寺)。鉄眼和尚(瑞龍寺)。中井鋆庵(誓願寺)。中江岷山(一心寺)。銅屋貞柳(清水西阪下)。並木正三(法善寺)。尾藤温洲(長楽寺)。藤原家隆(夕陽丘)。松尾芭蕉(四天王寺)。矢頭長助(浄祐寺)。阪本鼎斎(大倫寺)。

京都、その他に墓碑を存するもの。

伊藤若冲(相国寺)。伊藤仁斎(二尊院)。伊藤東涯(二尊院)。池大雅(浄光寺)。木下順庵(永観堂)。坂田藤十郎(西大谷)。鈴木蘭園(妙心寺)。松村呉春(金福寺)。皆川淇園(阿弥陀寺)。荻生徂徠。賀茂真淵。釧雲泉。古賀精里。古賀侗庵。柴野栗山。沢庵禅師。林子平。尾藤二洲。山梨稻川。渡辺崋山夫妻。天野可古。石橋友斎。小山田高家。武田弥亮。釈重流。釈道喜。龍田忠道。長崎桂斎。南源派老和尚。林野市之進。平瀬常信。向井霊蘭。山口伊豆守重信。米倉丹後守昌尹。米津出羽守田盛。三宅叔民。柳谷散充。塩原高尾。

関西大学蔵 青森県「是川遺跡」資料

角 田 芳 昭

本学資料室に所蔵する資料のうち今回は青森県八戸市是川出土の資料について考察してみたい。

「是川遺跡」は青森県八戸市是川中居にある縄文時代の大遺跡であり、一王寺、中居、堀田の遺跡があり、年代も若干の相違があるが、これを総称して「是川遺跡」と呼んでいる。この遺跡は大正9年(1920)以降地主の泉山岩次郎・泉山斐次郎氏が縄文晩期土器を多数発掘され著名となった。特に特殊泥炭層より漆器、櫛、編物残欠、弓、太刀等各種の木製品が発見され、当時の文化を識る上で貴重な資料となった。その後昭和3年史前学研究所の大山柏、喜田貞吉、杉山寿栄男、甲野勇氏等により学術調査が行なわれ、遺跡の全貌が解明紹介された。その後この遺跡の荒廃と湮滅を慮れた地元八戸郷土研究会の努力によりこの地に石碑が建てられた(昭和7年)。題字の揮毫を本山彦一氏(元毎日新聞社長、本学本山コレクション蒐集者)がされている。昭和7年『日本石器時代植物性遺物』が杉山・喜田両氏によって出版された。この図版に示された是川木製品の出土品に非常な興味を持たれた本山氏は杉山氏を介して、泉山岩次郎氏にその一部の割愛を依頼された。幸い快諾されたので杉山氏が泥炭層出土の一部とその残片を本山邸内農業博物館本山考古室に収められたのである。(史前学雑誌第5巻第1号、昭和8年) 推測するに是川遺跡碑の揮毫や寄付への感謝の気持で送られたものと思う。

以上の如く是川遺跡の出土品が若干本学へ所蔵されており、土器片、木片、植物質遺物等である。写真1は大洞式土器の中

に附着しているアスファルトで、恐らく膠着剤として使われるため保存されていたものであろう。写真2は植物の蔦類を組み合わせたもので籠等の残片であろう。写真3はナラの実である。写真4は桃の種子である。写真5は橡の実である。写真6はクルミの果核

である。写真7は山椒の実である。写真8は桜の皮である。写真9は栗材の残片である。その他藍胎漆器片、綴目のある樹皮残片、ナラ、栗材片、犬糞化石など数10片所蔵している。これらの資料を研究することにより当時の社会・経済・文化・交易など解明の糸ぐちとなるものである。特に「是川」は縄文晩期における亀ヶ岡文化の中心であり、木造町「亀ヶ岡遺跡」と双壁で、高度の文化生活が営まれていたものと推測される。

是川遺跡の実年代は定説はないが、この遺跡と同一時期の遺物を出した南津軽郡尾上町八幡崎泥炭層のクルミの堅果による¹⁴C(カーボン14)の測定(N-110理化学研究所)によると約3000年前(N-110 BC870±130)という年代が算出されている。または是川資料館収蔵庫東北部遺跡地より出土した木炭片を¹⁴Cにおいて測定したところ約2500年前(N-1128 BC540±210)という数値が算出されたことが報告されている。宮城県梁瀬浦遺跡の晩期大洞C₂式土器伴出の木炭片の測定では4例が報告されており、(N-2309 2850±90)、(N-2310 2580±90)、(N-2311 2810±95)、(N-2312 2590±90) 2940から2670年の間にある。さらに縄文晩期とした他地域をみると北海道札苅遺跡(GaK-4705 2650±120) 関東地方西ツ原遺跡(N-53 2780



是川遺跡碑
(青森県八戸市是川一王寺所在)

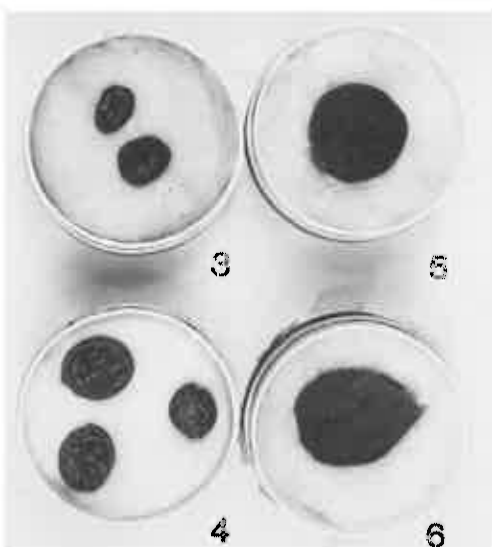
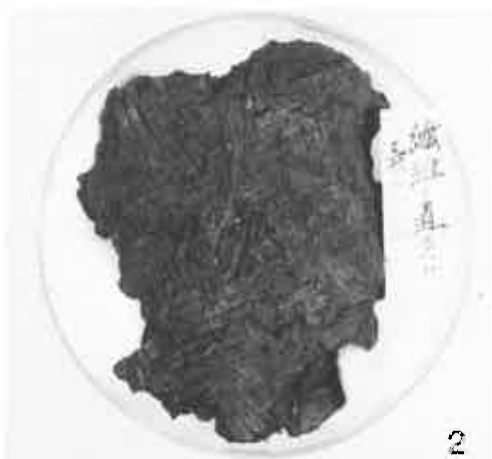


遺物出土状態(泉山岩次郎氏発掘)

±170) 東海地方吉胡貝塚 (M-165 2800±600) 九州地方上ノ原遺跡 (N-1199 2780±160) の報告例より縄文晩期の上限を約3000年として差しつかえないようである。

是川遺跡の実年代を研究のため本資料の写真2と9その他1点の3点を¹⁴C測定のため学習院大

学木越研究室へ依頼した。どんな結果が出るか楽しみである。この結果の報告は昭和60年6月発行される予定の『末永雅雄先生米寿記念続古代学論叢』(仮称)へ執筆を予定している。そして是川遺跡の実年代と是川文化圏について論考を進めてみたいと考えている。



関西大学所蔵 青森県「是川遺跡」泥炭層出土資料

昭和59年度調査報告「四国地方巡検記」

本学に所蔵する資料について毎年出土遺跡の調査を行ない、紀要、学術雑誌等へ報告してきたが、昭和59年度は9月下旬四国地方の遺跡を巡検し多大の成果を納めた。ここに報告しておきたい。

初日は徳島県下の調査を行なった。本学の所蔵遺物は「徳島市城山貝塚出土」とあり、石鏃、貝殻等一括と目録に記されている。遺跡は国鉄徳島駅東寄に小丘阜があり、その周辺が縄文遺跡地と聞き訪ねた。現在は徳島公園となり、城山貝塚の石碑と鳥居龍蔵博士の銅像が建っているのみである。貝の層が少々残っており、現在遺物の散布はない。

次に鳴門市の徳島県立鳥居記念博物館を見学した。撫養町妙見山公園の山頂に建築され、3層天主閣様式の鉄筋コンクリート4階建てで17.5mの高さである。

鳥居龍蔵博士の全業績を顕彰するため、多くの資料、遺品が展示されて市民の文化の向上に寄与している。彼は明治3年(1870)4月4日徳島に生まれ、少年時代から考古学に興味を持ち、明治23年上京して東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎に師事し、人類学、考古学の研究に専念。大正10年(1921)文学博士の学位を得た。その後東京帝国大学助教授、その他国学院、上智大学の教授を歴任し、また中国北京の燕京大学教授にもなり、昭和28年1月東京都において82才で逝去した。

日本国内をはじめ、中国東北3省、西南部モンゴル、台湾、千島、朝鮮半島、ブラジル、ペルーなど各地へ出張し、人類学、考古学、民俗学など実地調査及び採集を行なった。またこれらについての多数の著書、論文がある。彼は上京した際、

長岡孝太郎画伯の紹介状を持参し、元老院議官、東京人類学会会長神田孝平(本学の石器資料蒐集者)を訪問し、諸々の教えを受け、特に中国、台湾、東南アジアの研究をするようになったのは、神田孝平の教示によるものであると回想記に綴っている。

館内を廻って見学していると徳島市城山貝塚出土の土器と貝殻などが展示してあり、本学所蔵資料との対比に役立つものであった。

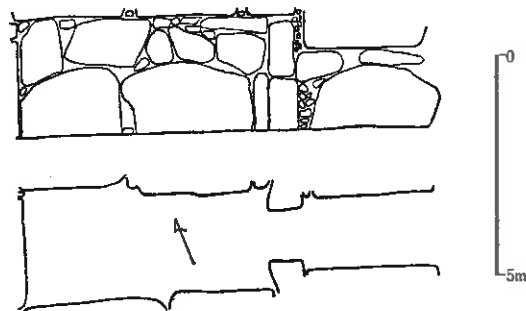
次に徳島県博物館を見学する。この建物は独立したものではなく、物産観光館、ロープウェイ駅と共用になっている。昭和34年12月に開館され、3階が郷土館で郷土の考古、歴史、民俗資料が展示されており、阿波人形頭など著名である。その他重要文化財指定の流水文銅鐸(阿南市山口町出土)など展示されている。

4階が科学室、5階が地学室と生物学室である。県立博物館施設としては比較的規模が小さい。しかし研究活動、調査活動など熱心で毎年紀要類が発行されている。現在新博物館の設立計画があり着々と準備されていると聞く。

第2日は高知県下の古墳遺跡を調査見学した。県教育委員会文化振興課技師山本哲也氏をわずらわし、伊野町指定文化財「枝川古墳群」と土佐3大巨石古墳の1つ「朝倉古墳」を見学した。枝川三号墳は高知市の西約9km伊野町枝川板屋2231番地にあり、枝川古墳群3基の内の1つで、小墳丘に横穴社石室を持ち、高知県における後期古墳の典型的なものとされている。石室は長さ3.2m、幅1.7mで羨道部は変形しているが、遺存度は良い。昭和56年の発掘調査において杯、高杯、壺及び鉄製品破片等が出土した。古墳は翌年2月伊野



朝倉古墳(高知市朝倉宮の奥字ウバ丙1574番地所在)



朝倉古墳実測図(『高知県の考古学』より)



北谷古墳群遠望(松山市権現町北谷)

町指定文化財となった。これらの古墳群の詳細な実測図、報告書がつくられ学術資料として活用されることを望むものである。

朝倉古墳は高知市朝倉宮の奥字ウバ丙1574番地に所在し、土佐3大巨石古墳の1つで、円墳の後期古墳である。丘陵の緩傾斜面に立地している横穴式石室で、長さ5.4m、幅2.5mで岩質は全て硅岩である。明治初年甲冑、馬具、鉄鏃、須恵器など副葬品が発掘されたといわれている。石室は割石あるいは自然石塊によって積築し、箱形状に近い立面をもつものもある。石室古墳の向きとして、開口し現存する古墳は67基あるとされ、南面は22基で、西南面19基、東南面13基、西北面6基その他東北面4基、西面3基などであり、全く開口例のないのは北面と東面である。南面、東南面が約半数あることは、遺骸の頭部を北に向け、南よりの太陽を受け安らかに眠るようにとの埋葬慣例思想が生まれていたものと考えられる。数少ない東北面、西面向きの開口は地勢に支配され、しかたなくその方向にむけて築造したものであろうと考えられている。(『高知県の考古学』による。)

第3日は高松より松山行国鉄急行バス「南国号」に乗りし愛媛県へ移動し、愛媛県出土の本学資料の遺跡を調査した。

愛媛県考古学会長西田栄氏および長井数秋、森光晴氏のご案内で先ず「温泉郡堀江村福住」出土須恵器4点とある目録の資料を確認するため同地を訪れた。ここは行政区画が変更され、松山市権現町北谷となっている。北谷古墳を中心とする古墳群であり、6世紀後半から7世紀初頭の円墳が主である。ここは未調査古墳が多数あり今後の調査が期待される。次いで「愛媛県温泉郡在原村西

ノ岡出土 柳原氏寄贈磨製石斧刃部1個」とある目録の場所を訪ねた。現在松山市西野町となっており「西野古墳群」であり、縄文・弥生・古墳時代遺物の散布地として知られている。愛媛県の県立運動公園が周辺へ設置され、道路、施設等の造成のため遺跡が破壊されつつあることは残念なことである。早急に保存措置を行なう必要があると思う。

第4日は新居浜市秋生町出土の「銅剣」についての調査を行なった。再度西田栄氏および真鍋修身氏のご案内で現地を訪ねた。ここは「大師泉遺跡」といわれている場所で、縄文時代より古墳時代へ至る複合遺跡である。遺跡の中心部に「泉」があり、この水は如何なる日でもでも湧き出たこ



北谷古墳より出土した須恵器(本学資料)

とはなく、住民の信仰の対象になっていると聞く。縄文時代の昔より水を離れての生活はありえないことがわかる。何か遺物は見つからないかと周辺の畠を歩き廻ったところ、縄文破片がみつかり、遺跡の確認も出来た。次いで新居浜市郷土美術館を見学し、最後に丸亀市の中津万象園の中にある丸亀美術館を見学した。当美術館は館長真鍋利光氏が私財を投じて中津万象園の改修を行なわれ、57年美術館を設立された。ミレー・コロドー・クールベ等の作品が展示され、庭園の美と共に芸術の館として文化の振興に寄与している感を深くした。

以上の如く今回の調査は非常に意義のあるもので多大の成果を挙げることができた。

最後に遺跡をご案内して下さった方々、および関係各位の方々に感謝の意を表します。

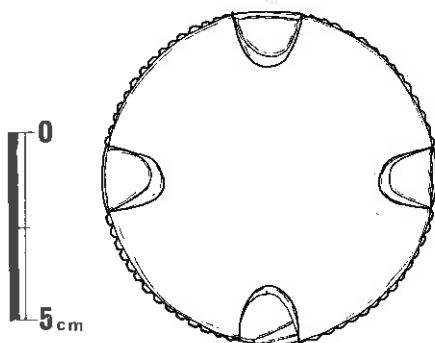
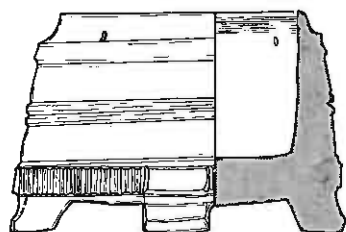
〔網干・角田〕

資料紹介「合子」

合子は、古墳時代前期を中心にして出土する石製品の種類であり、実用品であるか模造品であるかについては結論がでていない。ただ岡山県金蔵山古墳の副室に収められていた土製合子は、副葬品の外容器としてもちいられており、注意を必要とする。合子については、西谷真治氏が集成・分類について詳細な論考を発表されているので（註1）、以下西谷氏の業績に基づいて、本学所蔵の合子について述べていくことにする。

第1図に示すものは、本学所蔵品のうち最も優品であり、西谷氏の分類によるところのJa式に属する。材質は良質の碧玉で、色調は深緑色を呈する。器高5.90cm、胴部最大巾8.61cmを測り、胴部中央に2条の突線をめぐらし、胴部最下段に刻み目を施す。口縁部には相対する位置に、径約0.3cmの孔を穿ち、紐により蓋を結束したものと思われる、本来は印籠盒式の被せ蓋がともなっていたものと考えられる。脚は、隅丸三角形を呈し、底面には脚を削り出したと思われる痕跡がわずかに認められる。内外面とも極めて丁寧に研磨されている。本品とまったく同型のものは発見されていないが、同じく西谷氏の分類によるJa式に属するものとしては、岐阜県坂尻1号墳、矢道長塚古墳、三重県木造大塚古墳、京都府八幡西車塚古墳、奈良県佐味田宝塚古墳等より出土しており、合子のうちで最古の型式のものとされている。

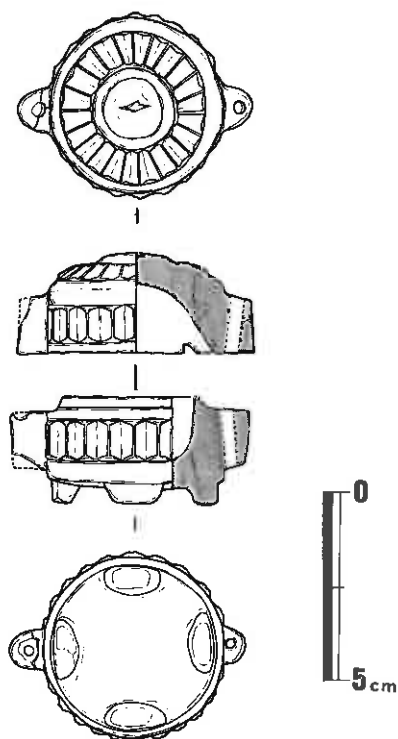
第2図に示すものは、関西大学工業技術研究所によって葉蠟石質蠟石と材質鑑定が行われており、広義の意味での滑石である。形態を西谷氏の分類に従うと、平面が円形を呈し、有脚、有孔であることからTa式に分類できる。この型式のものは、西谷氏は出土地不詳のためとりあげられていないが、本品が管見によるところの唯一のものである。通高5.16cm、胴部最大幅6.26cmを測る。蓋・身ともに紐を通すための径約0.4cmの孔を穿つ為に相対する位置に突起を有し、本来は紐によって結束されていたものと思われる。蓋・身の側面には、幅約0.9cmの突帯をめぐらし、その上に約0.5cm間隔に刻み目を施す。蓋の上面にも同様の刻み目が施されている。脚は身から削り出したものと思われ、長径約1.5cm、短径約0.7cm、高さ0.6cmを測る。内面は、蓋・身とも丸く削られており、一



第 1 図

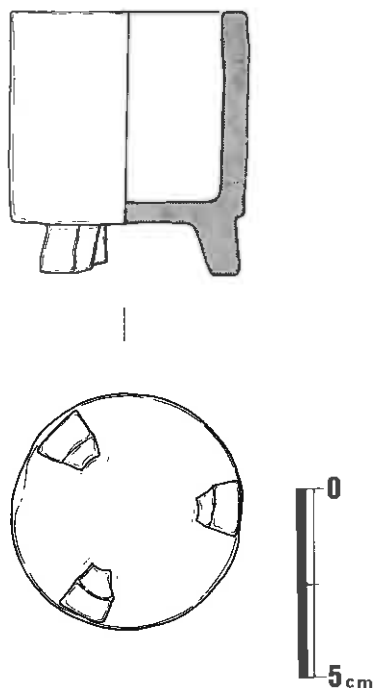
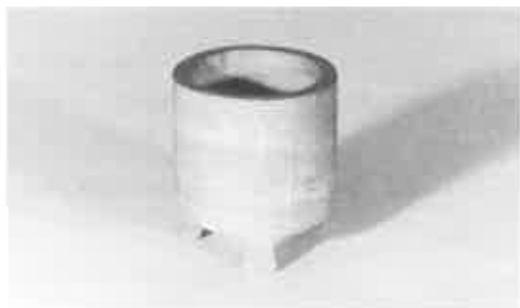
部にベンガラ（？）の附着が認められる。いずれにせよ本品は、滑石製品のため碧玉製品より若干時代が下るものと思われる。出土地が不詳であるのは極めて残念であるが、合子の研究にとって重要な位置を占める遺物と考える。





第 2 図

第 3 図に示すものは、長径6.29cm、短径5.98cmを測るやや楕円形の平面を呈し、器高6.84cm、厚さ0.6~0.7cmを測る。3本の脚を有し、外面は無文である。色調は灰緑色を呈し、材質は広義の滑石と思われる。本品と同様のものは、西谷氏が集成されたものにもなく、又古墳時代において三脚を有する合子というものも管見においては知らない。故に本品は出土地不詳ながらも古墳からの出土品とは考え難い点がいくつかあり、古墳時代の遺物とするには疑問が多い。



第 3 図

以上、本学に所蔵する3点の合子について述べてきたが、西谷氏も述べられているように、合子は、その分布が畿内を中心として、東は美濃、尾張、西は吉備までに限られており、畿内以外では、美濃・伊勢地方に濃厚に分布する。また、合子が出土する古墳は、各地方の盟主的古墳と考えられており、供伴遺物も鏡、鍬形石をはじめとする石製品等、優れた副葬品が出土する場合が多い。このように古墳時代前半を中心として出土する合子は、三角縁神獣鏡、石製腕飾類とともに畿内的色彩を強くもつ遺物であり、前期畿内政権の伸展過程を考える上で重要な遺物である。

註1 『古墳出土の盒』 西谷真治

考古学雑誌第55巻4号昭和45年

〈参考文献〉

- 富民協会・農業博物館 『本山考古室要録』
末永雅雄 昭和10年
- 『考古学資料図鑑』 関西大学 昭和48年
- 『古文化財保存科学研究会報告』第1冊
関西大学工業技術研究所
関西大学考古学等資料室 昭和59年
[徳田誠志]

◎資料貸出

59.11 平形銅剣 1点

(愛媛県新居浜市萩生大師泉出土)

新居浜市立郷土美術館「郷土資料特別展」へ

◎一般公開と公開講演会について

「開かれた大学」構想の一環として大学所蔵の考古、歴史、民俗等の資料約3000点を一般公開し、併せて公開講演会を開催した。第2回目で、東は東京都から西は高松市までの見学者があり、終日熱心に見学され、また諸々の質問等も出て、公開の意義は大なるものがあつた。

公開講演会も文学部上井久義教授と加藤一朗教授により行なわれ、多数の聴視者が熱心に聞き入った。なお期間中の見学者は約400名であつた。

公開日 昭和59年10月1日(月)～10月7日(日)

公開講演会 昭和59年10月6日(土) 13時～17時

講演者 文学部教授 上井久義氏

「紀伊半島における民俗祭祀」

文学部教授 加藤一朗氏

「関西大学所蔵資料より古代エジプト文化を考える」

阡 陵 の 由 来

創刊の彙報に横田健一先生から「^{せんりやう}阡陵」という題をいただいた。本学の学生が愛唱する逍遙歌の一節に「名も千陵の丈夫が」とあり、大学の所在地「千里山」に因んだものである。阡は数字であると共に「ミチ」「墓道」という意味もある。「陵」は「ヲカ」「ツカ」「ミササギ」であり、共に考古学に関連する。

資料室の彙報にふさわしい表題である。

編集後記

ここに第10号をお届けいたします。春秋2回発行を心構けて以来5年、順調に発行できたことは諸先生方、大学当局のご指導とご支援のたまものと存じます。ここに感謝申し上げます。

昭和55年創刊であり、『^{せんりやう}阡陵』という誌名を横田健一委員長(文学部教授)よりいただいた。記事は考古・歴史・美術・民俗等に関する論考、資料室の歴史、資料紹介、学術調査報告、博物館紹介などであり、以降この型式を踏襲し、編集方針とされています。12ページとはいえ、学術的彙報として教育研究に寄与し現在に至っております。なお第9号より16ページとなり紙面の充実がはかられていま

す。

関西大学も昭和61年(1986)が創立100周年です。本資料室においても学術図書の出版を計画し準備中です。諸先生方のご指導をお待ちしております。

表紙の写真は埼玉県北埼玉郡上中条村出土の古墳時代「人物埴輪」で、わが国出土の人物埴輪のなかでも容姿の端麗さにおいて屈指のものと評価を受けています。斜め前方よりみた表情は今にも語りかけそうな感じがでており、芸術性の高い資料と申せます。他にも同村出土と伝えられるものがあり、作風が類似しているところから、当時既に埴輪を製造する職業集団が存在していたと推測されます。

[角田芳昭]